



書評

子どものことばの教育学の新たな地平を目指して

川上郁雄 著『「移動する子どもたち」のことばの教育学』(2011年, くろしお出版)

浜田 麻里*

■要旨

『「移動する子どもたち」のことばの教育学』について、「ことばの力」とJSLバンドスケールとの関係、ことばの力を捉えることの政治性、「移動する子ども」学と「移動する大人」学、の3つの視点から評した。

■キーワード

移動する子ども
ことばの力
JSLバンドスケール
日本語公用語化
子どもの第二言語習得と
大人の第二言語習得

©2011. 「移動する子どもたち」研究会. <http://www.gsjal.jp/childforum/>

1. はじめに

川上郁雄著『「移動する子どもたち」のことばの教育学』は、2002年に川上郁雄氏が早稲田大学に移られて以来、発表されてきた主要論文を集め、大幅に加筆されたものである。すなわち、本書には川上年少者日本語教育学の展開の軌跡が描き出されていると言ってよいだろう。本書の上梓によって「移動する子どもたち」「JSLバンドスケール」「ことばの力」など、川上年少者日本語教育学、いな、川上氏の提唱するところの「移動する子ども」学の中心概念に関する論考をまとめて手に取ることができるようになったわけで、誠に喜ばしい限りである。

本書のタイトルにもなっている「移動する子ども」とは、「空間的に移動する」「言語間を移動する」「言語教育カテゴリー間を移動する」という3つの条件を持つ分析概念である(p.6)。従来「外国につながる子ども」「JSLの子ども」などと呼ばれてきた子ども達の「複数のこ

* 京都教育大学国文学科 (Eメール: hamadam@kyokyo-u.ac.jp)

とばの学び」を、子ども達の主体的な生き方を通して理解し、ことばの教育をどのように行うのかを構想するために重要な概念として提案されている。

本書全体の構成は以下の通りである。

序：「移動する子どもたち」のことばの教育を考える

第1部 なぜ「ことばの力」の把握が大切か

第1章 「移動する子どもたち」のことばの教育とは何か

第2章 ことばの力の捉え方が言語教育のあり方を決定する

第3章 子どものことばの力を把握することの意味とは

第2部 「移動する子どもたち」のことばの学びをどうデザインするか

第4章 「移動する子どもたち」とどう向き合い、実践を行なうのか——主体性と動態性の年少者日本語教育学

第5章 実践と「教材」はどう結びつくのか——「移動する子どもたち」への実践的教材論の試み

第6章 学校教育環境を捉え直す——日本語教育コーディネーターの創設

第3部 「移動する子どもたち」のアイデンティティと「ことばの力」

第7章 「移動する子どもたち」に必要な「ことばの力」を捉え直す

第8章 「移動する子どもたち」のアイデンティティの課題をどう捉えるか

第9章 「移動する子どもたち」への支援と連携とは何か

終章：「移動する子ども」学の創発へ向けて——日本語教育学的語りと文化人類学的語りの節合

本書は第二言語習得論から言語政策研究、文化人類学までと広範な領域をカバーしており、川上氏の学識の多彩さを感じさせる。また、子どものことばの教育が、実践研究、理論研究、果ては学びを支えるための行政との連携までも含め、さまざまな領域に関わる問題であることを自らの活動を通して示されていることも敬服に値する。まさに川上氏自身が、学問と実践を、領域を越えて自由自在に「移動する」研究者であることがわかる。さらにこの著作の一部として引用されてもいる多くの研究内容の記述から、川上研究室の構成員との（指導というより、あえて協働と呼びたいような）討論の熱気、共同研究者との作業の濃厚さが紙背から伝わってくるようで、読み飛ばすということを許さない、重厚な一冊となっている。

小稿は、書評というよりも、学生が教師に質問するように、筆者から川上氏にお教えいただきたいと願う点を羅列したものに終わりそうであるが、以下しばらくおつきあいいただきたい。

2. 「ことばの力」と JSL バンドスケール

川上氏の著作の魅力は「移動する子ども」以外にも、「主体性と動態性の年少者日本語教育」など、スマートなキーワードがあちらこちらにきら星のごとくちりばめられている点である。「ことばの力」もその一つと言えるだろう。

本書では「ことばの力」に関する議論は第 2 章で初めて正面から扱われる。そして「実践者（あるいは授業設計者）がことばの力をどのように捉えるかが言語教育の実践を形づける」という重要な提案がなされる。

この日本語の「ことばの力」を把握するためのツールとして開発されたのが JSL バンドスケールである。子どものことばの力は、動的、非均質的、相互作用的であり、ペーパーテストでは測ることができない。そこで JSL バンドスケールでは、複数の判定者が子どもの学習の様子や、先生、クラスメートとのやりとりの様子などを観察し、そこで見られる言語使用の特徴に基づいてことばの力を判定する。

「ことばの力」と JSL バンドスケールとは当初、表裏一体の関係で提案され、「ことばの力」の実体が何であるかは、JSL バンドスケールによって代弁される形となっている。「子どもが日本語を使って『他者とやりとりすることばの力の総体』(p.69)」といった記述もあるが、「ことばの力」そのものの中身については明瞭にされてはいない。

それが、第 7 章に到ると、ことばの力とは何かがあらためて問い直され、「自己実現を目指す力」「学ぶ力・生きる力」「自主学習能力」などさまざまな研究者による議論が示されるようになる (p.162)。最終的には「日本語の力がどれくらいか、母語が何語かにかかわらず、子どもにとって必要な力」という見方までが紹介されている (p.164)。

このように川上氏の提案した「ことばの力」という概念は、実践研究の積み重ねの中で磨かれ、先鋭化してきたのだということが見て取れる。その他のキーワードについても、今後さらに精緻化されていくことを期待したいと思う。

しかしその一方で、「ことばの力」の捉え方が深化した結果、JSL バンドスケールと「ことばの力」との関係は、かえって曖昧になってしまったようにも思われる。JSL バンドスケールで捉えていた力をよく検討してみたらこのような力だった、ということなのか。それとも、JSL バンドスケールで捉えている力以上の力が「移動する子ども」に求められていることを意味するのか。JSL バンドスケールが複数言語能力を前提に作られているにせよ、日本語の力がどれくらいかにかかわらないとすれば、どのようにすればこのような力が把握できるのか。

追究されるべき対象が「移動する子どものことばの力」へと新たな展開を遂げようとしているいま、JSL バンドスケールにも、それと歩みをともにした新展開が必要になっているのではないのだろうか。

3. ことばの力を捉えることの政治性をめぐって

川上氏は子どものことばの力を捉えることを一貫して「実践」の立場から論じられている。例えば「(JSLバンドスケールは)『指導的』な観点から把握することができる『方法論』(p.55)」とされている。

しかしながら、川上氏がJSLバンドスケールの開発に当たって参考にされたオーストラリアのESLバンドスケールは、単に指導に役立てるというだけではなく、非常に政治的な存在でもある。

例えば、クイーンズランド州ではフレームワーク(=バンドスケール)で測られた結果については、保護者への報告だけでなく、学校評価、州政府や連邦政府単位での教育施策、言語施策の評価の材料とされる。

そしてそのことと表裏一体になっているのが、「全ての生徒は標準オーストラリア英語の高度な口頭筆記能力を習得しなければならない」「クイーンズランド州の(公立)学校では、教授言語はオーストラリア標準英語である」ということである(Department of Education, Training and the Arts, Government of Queensland, 2008, p.12)。すなわち、学校での使用言語は英語であるからESL教育に力を入れる、そのためにバンドスケールを用いて、ESLの子ども達のことばの力の把握を綿密に行う必要がある、ということになる。したがって少なくとも学校では、子どもの母語を用いた授業を行うことはできない(子どもの母語を言語として学ぶのはよいが)。同様の事情はアメリカにも見られる。特に英語公用語化論の盛んなカリフォルニア州での状況はバトラー後藤(2003)に詳しい。

日本では現在、日本語は事実上の国家語、公用語でありながら、そのように規定されていない。このような現状の中、西原(2011)では、日本でも公用語を制定すべきだとの提言がなされている。西原は、もし日本語が公用語となるのであれば、「公用語の習得は、当然公的財源を使用し、公的機関によって運営されるべき制度として確立されなければならない(p.3)」とする。つまり、日本語習得を国の財政措置を伴った言語政策、言語計画の対象とすべく、あえて法的整備をすべきだというのである。

川上氏がこの提案についてどのような考えをお持ちなのかは全くわからないが、もし日本語が公用語となるような日が来た場合、その言語能力を測定し、評価する手段が必要となることは当然である。そのとき、公用語としての日本語の「ことばの力」はどのように捉えられるべきなのか。JSLバンドスケールはそれを評価するツールとして機能しうるのか。

川上氏の著作の行間を読む限りにおいては、JSLバンドスケールはあくまで行政との「支援」「連携」のための媒介であり、政策評価の道具となることは必ずしも志向されていない。評価の主観性を強調しておられるのは、あえてそうならないような伏線を張っておられるようにも感じられる。しかし、「移動する子ども」のことばの力を考えることがグローバル時代を生きる子どもに真に求められることばの力を考えることにつながるのであれば、その言語

観を言語政策に具現化する枠組みとして何が有効なのかということも、「移動する子ども」学からぜひともご提案いただきたいと願う。

4. 「移動する子ども」学と「移動する大人」学は相容れないのか？

川上氏は本書の最後で「移動する子ども」学の創発を提唱しておられる。筆者もこの提案には賛同の意を表したい。

その一方で、「移動する子ども」という問題機制は「移動する大人」という問題機制と手を携えて進んでいくべきではないかという思いもある。

本書ではあちらこちらで、「移動する子ども」の問題は大人とはちがう、という趣旨の記述がされている。例えば「移動する子ども」のアイデンティティの問題の重要性に言及した以下の部分もその一つである。

学習者と実践者の相互作用的關係によって捉えられる実践は、大人への第二言語教育と必ずしも同じ問題領域を提示しない。(中略)「移動する子ども」の場合は、「移動する子ども」自身もつ複数言語能力についての意識やそのことが原因となって生まれる他者からのまなざしとの間で、「自分が思うこと」と「他者が思うこと」との間にズレが生まれ、自分の中に自己の統一的な像を描けないことがある。そのため、ときに、混乱や戸惑いや葛藤が生まれる。(pp. 25-26)

しかしながら、大人の第二言語習得研究においてもアイデンティティや主体性は非常に大きな問題であり、ポストモダニズムを背景にこの15年ほどで多くの研究がなされている(特に参照すべきものとして、Siegal, 1996; Firth & Wagner, 1997; Norton, 2000; Pavlenko & Blackledge, 2004 等。Block, 2007 に詳細なレビューがある)。その中で、第二言語で話すことで、話者としての正統性が認められなかったり、自分の意にそまないアイデンティティを付与されたりすること、そのことが第二言語習得の過程を大きく左右することが実証的研究によって示されている。日本語教育においてもすでに中山(2008, 2009)によって『自分らしい日本語』の習得のために日本語教育は何をすべきか? という問いかけがなされている。

「移動する子ども」学は、「移動する大人」学の成果との積極的な協働を図る必要性があるのではないかと。たとえば「子ども」における主体性・アイデンティティと「大人」における主体性・アイデンティティは、どこが同じでどこがちがうのか、といったことを明らかにすることで、より有効な「移動する子ども」の実践につなげることができるものと考えられる。

5. おわりに

以上、述べてきたことは、いずれも評者の勝手な思い込み、期待に満ちたものである。年少者日本語教育の領域をリードする川上氏であるからこそ、「移動する子ども」学のさらなる深化、発展を先導していただきたいという気持ちから出たものにすぎない。浅学ゆえの誤解、誤謬については、なにとぞご海容いただければと願う次第である。

子どものことばの教育学は、子どもが「移動する」かしないかにかかわらず、子どもたちが多くの他者と出会い、自らと対話することを可能とし、それによってより豊かな人生を送ることができるようになることを目指すべきであると考え。そのためには、ことばの教育の成果は、それによって子どもたちの人生で何が可能になったのかということだけでなく、それによって我々の社会全体がどれだけ豊かになったのか、ということまでも含めた、空間的にも時間的にもより広範な視点から問い直されることが必要になるだろう。それは気も遠くなるような道のりにちがいない。

この遙かなる地平を目指した長い旅路に向けて、本書の示した理論や実践はまずは一步を踏み出している。子どものことばの教育のあり方についての議論の出発点を、そしてこれから目指すべき方向性の指針を、本書は実り多く提示してくれていると言えるのではないだろうか。

文献

- 中山亜紀子(2008).『「日本語を話す私」と自分らしさ——韓国人留学生のライフストーリー』
大阪大学大学院文学研究科博士学位申請論文.
- 中山亜紀子(2009年10月11日).「第二言語を使って生きるという体験——アイデンティティの(再)構築をめぐる」2009年度日本語教育学会秋季大会口頭発表.
- 西原鈴子(2011年11月23日).「多文化共生社会における日本語教育とは?」『多文化共生社会における日本語教育研究』国立国語研究所日本語教育研究・情報センター主催共同研究プロジェクト公開シンポジウム配付資料.
- バトラー後藤裕子(2003).カリフォルニアの言語政策とその影響『多言語社会の言語文化教育』(pp.199-230)くろしお出版.
- Block, D. (2007). The rise of identity in SLA research, post Firth and Wagner (1997). *Modern Language Journal*, 91, 863-876.
- Department of Education, Training and the Arts, Government of Queensland.(2008). *P-12 Curriculum Framework*. Retrieved from <http://education.qld.gov.au/curriculum/framework/p-12/index.html>
- Firth, A. & Wagner, J. (1997). On discourse, communication ,and (some) fundamental concepts in SLA Research. *Modern Language Journal*, 81, 286-300.

- Norton, B. (2000). *Identity and Language Learning: Gender, Ethnicity and Educational Change*. London: Longman.
- Pavlenko, A. and Blackledge, A. (Eds.) (2004). *Negotiation of Identities in Multilingual Contexts*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Siegal, M. (1996). The role of learner subjectivity in second language sociolinguistic Competency: Western woman learning Japanese. *Applied Linguistics*, 7(3), 356-381.

ジャーナル「移動する子どもたち」—— ことばの教育を創発する

第2号 2011年5月発行

発 行 者 「移動する子どもたち」研究会

代表 川上郁雄

169-8050 東京都新宿区西早稲田 1-7-14

早稲田大学日本語教育研究センター気付

電話：(03) 5346-1893 Eメール：kodomoniwego@list.waseda.jp

©「移動する子どもたち」研究会 2011.